

J F Eグループインベスターズ ミーティング
（2018年度第1四半期決算および2018年度業績見通し）
2018年7月31日開催 質疑要旨

Q. 従来、この第1四半期決算のタイミングでは、年間の当期利益や配当等について明確には打ち出してこなかった印象があるが、今回このタイミングで開示したのは堅調な鋼材市況等を背景とした業績に対する確信度の高さの表れと理解して良いか。

A. なるべく透明性の高い開示を行うというのが、当社の基本的スタンス。過去には、鉄鋼業界における外部環境のボラティリティの高さを理由に見通しの開示を見送ったこともあったが、どの業界でもボラティリティがあることには変わらない。開示した年間の当期利益や配当予想については、今後外部環境等に大きく変化が生じた場合には見直しも行い得る。

Q. 足下、厚板の価格がようやく上昇してくるなどの動きが見られるが、分野別の需要環境の見方を教えてほしい。また、原料炭価格の見通しについても教えてほしい。

A. 国内・海外ともに、総じて需要は堅調だと見ている。一例としてシームレスを挙げれば、原油価格が上昇してきていることもあり、知多製造所の稼働率は高まってきている。ただ、収益面としては改善傾向にはあるものの、まだ十分と言える水準にはない。

A. 厚板は数量面、価格面ともに改善が進んでいる。原料炭の契約価格の前提については、足下の市況は一時より下落して170ドル/t台の水準ではあるが、先行きを見通すことが難しいこともあり、今回の前提では第1四半期のインデックス平均価格である197ドル/t程度の水準が継続するものとして見ている。

Q. 18年度上期に起きた生産トラブルや豪雨影響が無ければ、粗鋼生産量はどの程度の水準を期待できたか教えてほしい。

A. 生産トラブルについては第1四半期に西日本製鉄所の一部で起きたが、既に復旧している。また西日本での豪雨影響については、設備に対するものというよりは倉敷在住の従業員への影響が中心であった。もちろん一時的に生産を落としたことにより粗鋼生産への影響はあったが、こちらに関しては今後回復していく見込みである。したがって、第1四半期及び上期の粗鋼生産量については、我々が当初見ていた水準と比べれば少し低い、その分は下期で取り返すことで年間の粗鋼生産量2,900万トンを達成していく。

Q. 18年度の業績見通しの前提について、輸出の一般市況品のスプレッドを足下の水準から一定程度下げているということであったが、具体的にはどの程度のスプレッド水準を想定しているか教えてほしい。

A. 9月末にかけては、足下のスプレッドの水準から数十^Fレベル縮小する前提。下期は9月末にかけて縮小したスプレッドの水準が、横ばいで推移する前提としている。

Q. 主原料価格の上昇分に対する2万円の値上げは進展してきたと思うが、副原料等諸物価の上昇分に対する追加値上げの打ち出しや、進捗を教えてほしい。

A. これまで進めてきた2万円の値上げについては、今の状況からして達成は間近と見ている。副原料や資材等の要素についても、事業を遂行していくうえで鋼材価格への反映が必要であるが、進め方等については検討中であり、現時点では具体的内容については申し上げられない。

Q. 第1四半期の鋼材平均価格について、前年度第4四半期に比べ大きく上昇している背景を教えてほしい。

A. 輸出市況が好調なことに加え、国内での2万円の価格改善にむけた継続的な取り組みが価格上昇につながっている。

Q. 足下で副原料市況が下落している影響について教えてほしい。市況下落によりコスト面から収益改善につながるのか、あるいは、今後の価格交渉面でスタンスに変化が生じかねないことになるのか。

A. 副原料市況の下落は我々のコストにも一部は反映されるかもしれないが、全体として金属等副原料のコストアップはかなり大きいため、一部下落したことで方針が変わることではなく、価格反映について今後も取り組んでいくというスタンスに変わりはない。

Q. 年間業績見通しにおいて、前回公表に比べスプレッドで500億円改善した要因について教えてほしい。

A. 主に海外市況の改善によるものが大きい。4月公表時点では輸出の一般市況分野については、特に第2四半期以降の見通しが不透明なことから一定水準下落する前提として粗試算を策定していた。今回の見通しについては、4月から6月までの実績や足下で見えている市況上昇を織り込んでおり、9月末に向けて一定の市況調整リスクはみているものの、4月に比べ市況見通しを底上げして策定しており、スプレッドで500億円の改善につながった。

Q. 最近の報道では、紐付き分野の交渉に関して値上げの方向で進んでいるとの話もあるが、これまでの値上げの取り組み等もあり陥没価格は是正されると考えてよいか。

A. 需給環境変化や交渉の過程で価格改善がかなり進んでいるものもあるが、必ずしも全ての品種でできているわけではない。まだ満足できる水準に到達していない品種もあり、こうした品種については、再生産可能でかつ持続的成長ができる価格水準を目指して引き続き交渉をしていく。

Q. 品種構成の見通しについて教えてほしい。

A. 国内輸出ともに需要は総じて堅調で品種を問わず伸びており、今のところ品種構成面では大きな変化はない。

Q. FHS の 2 基目の高炉が稼働したが、今後の出荷数量面に与える効果を教えてほしい。

A. 第 2 高炉の立上げに伴い、次第に出荷数量は増えていく。足下はベトナム国内の需要も強く、内需にまずは応えている段階だが、今後は我々の元々の戦略に則り、東南アジアにおける販売数量拡大を目指していく。

以上

本資料は、金融商品取引法上のディスクロージャー資料ではなく、その情報の正確性、完全性を保証するものではありません。また、提示された予測等は説明会の時点で入手された情報に基づくものであり、不確定要素を含んでおります。従いまして、本資料のみに依拠して投資判断されますことはお控え下さいますようお願い致します。本資料利用の結果生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いません。